研究雑話（6）
「＜ブブ＞、＜ププ＞と反復する機会があったなら。」（E・セガン）
手は突き出た大脳・セガン教育の原理（四）

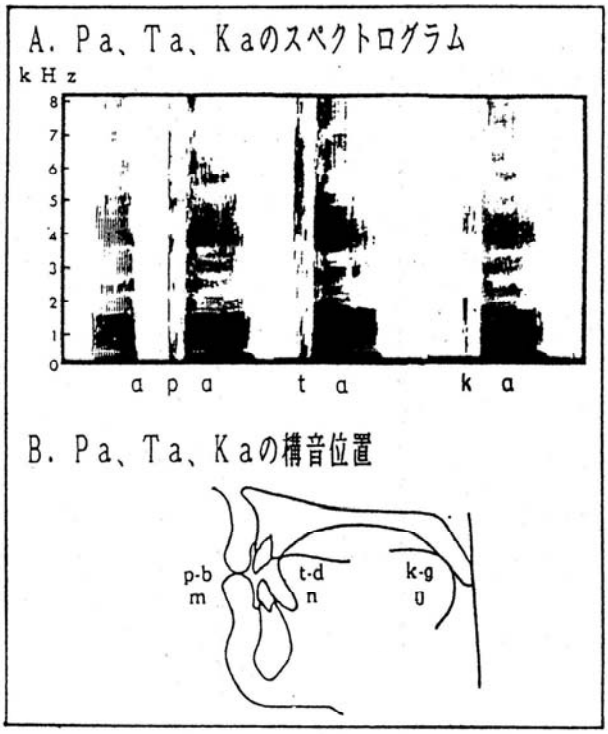
藤井　力夫

前回は胸を張ってしっかり歩けるようにと企図したE・セガンのプログラムについてお話しました。足腰は無論としても手に着目し、鉄亜鈴を持って歩いたり、梯子を登ったり、しかも背中を梯子につけて登るといった方法まで考えていたことを紹介しました。今回はしっかり歩けることにより身体が立ち顎が引け、結果として複雑な発音ができ、お話できるようになるとするセガンの考えについてお話したいと思います。

「＜ア＞、＜イ＞、＜オ＞しか発音できない場合、それは叫ぶだけで、お話へと発展できない。残念ながら我々が対象とする人たちはほとんどそうで、学習の時期を過ぎてしまった。せめて＜マ＞とか＜バ＞とか＜パ＞と発音できた時に、＜ババ＞＜ブブ＞＜ププ＞等とお話しする機会があったなら、言葉も発達してきたのだけれど。＜ババ＞＜ブブ＞は名詞というよりも動作や要求を表現する動詞の意味合いが強いのである」（一八四一）

これがコトバの発達についてのE・セガンの命題であった。今日的にみてもきわめて優れた着想で、以下、私なりに二つの点を強調したい。

第一。「パ」、「タ」、「カ」の声紋（スペクトログラム）と構音位置から（図AとB）。手足の共同運動の調節は目に見えるけれども、コトバの調節は外から見ることができない。この点でコトバの指導は難しい。「ア」「イ」「オ」といった母音の学習が先だと信じられているが、そうではない。「ママ」「ブブ」といった破裂音が先行する。図Aを見ていただきたい。同じく両唇の破裂による「パ」と、舌先と歯茎部の破裂音「タ」、口腔の奥での破裂音「カ」の声紋と構音位置を示す。P、T、Kの子音が入るだけで調節の意味合いがまったく違うことがわかる。年齢的にも「パ」は一歳代後半、「タ」は二歳代前半、「カ」は三歳代前半で意識的に調音される。手足の調節とは次のように対応。＜パパ＞：歩行の獲得と指さし、＜タタ＞：砂場あそび姿勢とスコップ操作、＜カンカン＞：ケンケンの開始と描画での円模倣等。セガンの時代に声紋分析器があったわけではない。見事に本質を観察していたと言えよう。



第二。「マンマ」、「ブーブ」、「プープー」等反復する機会があったなら。最初の「ブ」（両唇閉塞音）は、離乳食開始時で、口元に宝石のような泡をふく四、五カ月頃から始まる。首がすわり支え座位が可能になることと関係している。背筋を伸ばしたり、何かを取ろうと手をあげたり手指の動きが活発になる中でいっそう増強される。食べさせたいお母さんと食べたいあるいは遊びたい赤ちゃんとのやりとりの中でお話になっていく。その後、這い這い動作のなかで呼吸のリズム、とくに呼気の時間やタイミング（左右上肢移動時と呼気相の同期）を学習し、それがいっそう明瞭な発音へと導く。「ブブ」、「ママ」と反復する理由は、呼気の自然な在り方であるとともに、「食べたい」「触りたい」「飲みたい」といった気持ちや要求を表現するという赤ちゃん自身の意志によるものと思われる。これはとても大事で、E・セガンは言葉の獲得の源泉を主体、子どもにおける要求と期待にあったと考えていた。

それゆえ歩行が安定することは自らの動作や意志が明確になることであり、いろんな物に触れ何かに見立てて遊ぶほど、言葉が脳神経系にイメージをつくり、経験を整理する役割をになうことになるのである。

（北海道教育大学助教授）